

落語の歴史と技

公益社団法人・落語芸術協会 真打・雷門小助六

1、落語の歴史

1) 元はお寺のお説教・安楽庵策伝の醒睡笑



👉 落語を聞く気がない人ばかりの会場はいやだ

きょうは師匠であり、先生ですので、前半は落語の歴史についておしゃべりさせていただきますが、私は地元の松戸の駅前にある聖徳大学という女子大でも、オープンアカデミーの講師として江戸の文化や落語についてお話しさせていただいています。

👉 通夜に合った話なんてあたし教わってません

15 年くらい前に父方の母親が亡くなった時に、長野市のお通夜の会場に呼ばれました。東京で仕事を終えて新幹線ですっ飛んで行って、みんなが待ち構えているところに着くと、「みんなお前が来るのを待ってたんだよ」「さあさあ、あいさつは後でいいからおばあちゃんに線香をあげて」「終わった？ そらこっち戻ってきて」「さあさあさあさあ」「一席やれよ」。これ、できます？ そこに集まった人は落語を聞きたくて集まっているんじゃない。お通夜だから集まっている。しかも何人かはベロベロ。そして全員親戚ですから。「勘弁してよ」「いいからやれ」「こんなところで落語は無理だよ」なんてやり合っていたら、上座に座っているご住職が「おばあちゃんも喜びますよ」。これ言われたらやらないわけにいかないなあとうなだれていたら、おっちょこちょいのおじさんが「通夜に合った話をやれ」。そんなのありませんから。入門するといろいろ教えてもらうんですよ。小さい子どもがいるところ、若い女の人が大勢いるところ。それぞれの場所で受ける話を教えてくれます。でも通夜に合った話は教えてもらってません。



👉 落語の起源は昔話？ 御伽衆？ お坊さん？

お坊さんと落語は縁の深いものがあります。落語がどういうところから始まったのかについては諸説ありまして、例えば昔話や民話から始まったという説がある。あるいは戦国武将やお大名が、話のうまい御伽衆（おとぎしゅう）を呼んで庶民の暮らしぶりを面白おかしく教えてもらったことからとか、お坊さんが檀家の前でお説教や法話をしたのが始まりという説もあります。学校でもむずかしい話ばかり聞いていると生徒さんたちが飽きてしまいますから、合い間合い間に面白い話をする。この部分が独立して出来上がったのが落語だと言われています。

👉 説教上手で落語家の元祖と言われる安楽庵策伝

お説教が特に上手だったお坊さんに安楽庵策伝という方がいました。岐阜から京都に出てきて、浄土宗のお坊さんとして大変に名を売ったのですが、それが京都所司代の板倉重宗の目に止まって一冊にまとめてもらいたいと頼まれ、「醒睡笑」という本を書きました。その中にいまでも高座でおしゃべりする「子ほめ」「牛ほめ」や、きょうお話しする「平林」といった話の元になった原話が収められていることもあり、この安楽庵策伝が落語家の元祖だと言われています。ちなみにこの方は 1554 年に生まれ 1642 年に亡くなっています。

2) 職業落語家の登場・江戸と上方の違い

☺ 上方は屋外、江戸は屋内で始まった本格落語



ただ策伝は落語家ではなくてお坊さんです。落語をおしゃべりしてお客さまからお足をいただき、それを生活の生業にする人間が生まれたのはもう少し後のことです。元禄時代、京都と大坂と江戸に、ほぼ同時期に落語家の始まりと言われている人が出てきます。京都には露の五郎兵衛、大坂は米沢彦八、江戸は鹿野武左衛門。露の五郎兵衛という人は京都の四条河原で、米沢彦八は大坂の生國魂神社で落語を始めました。鹿野武左衛門は場所がちょっと変わっていて、料理屋や銭湯で話し始めたそうです。四条河原や生國魂神社でやるというのはいわゆる大道芸ですね。これに対し鹿野は屋内で始めたんです。今は江戸の落語も上方落語も、ひとくくりに「落語」とされていますが、始まりは違ったのです。また、江戸落語は座布団

以外には何もないのに対し、上方落語では見台という台を置き、前に膝隠しという板を立て、左手に持った小拍子という小さい拍子木をパタパタと叩きながらおしゃべりをします。

☺ 大道芸が発祥の上方落語は叩きながらしゃべる

上方落語のこうしたスタイルは、その発祥に原因があります。上方の落語家さんたちは元々は大道芸。いまでもお祭りなんかの時に大道で物を売る方がいますが、バナナのたたき売りや、男はつらいよの寅さんたちは、台をパンパン叩きながらおしゃべりしますね。ただしゃべってるだけだと、人はなかなか足を止めてはくれませんが、音がすると「何だろう」って立ち止まってくれる。そこから芸を見せてお足をいただく。しかし鹿野のように屋内で芸を見せる江戸の落語家たちは、パンパン叩く必要がありませんでした。もっともいまでは、上方でも台を置かない落語家さんもいるようですが。

☺ 島流しの鹿野武左衛門の功績はなかったことに

露の五郎兵衛と米沢彦八には弟子が大勢できて、上方落語は脈々と現在に続いていきますが、江戸の鹿野には弟子らしい弟子がいませんでした。当時江戸では流行り病、今でいうコレラが蔓延していて、それを直すための都市伝説が流行り出しました。その中には、馬が「梅干を食べるとコレラにならない」としゃべったという話もありました。コロナ禍でもアマビエが何かしゃべったとか言いましたけどね。このデマがどうして広がったかというと、鹿野武左衛門が当時、「武助馬」という落語をおはこにしていました。これは、武助という歌舞伎役者が馬の足の役をやった際に、武助が馬の被り物の中でしゃべっちゃったという他愛のない話ですが、この落語にヒントを得て、馬が「梅干を食べるとコレラにならない」としゃべったというデマに発展したんですね。鹿野はお上から咎を受けて島流しになり、数年後に江戸に戻ってきたのですが、すぐに命を落としてしまい、弟子をとることができなかったのです。そして江戸落語はそこでいったん途切れてしまいます。



☺ 烏亭焉馬が江戸落語の中興の祖

再び落語が江戸の庶民に楽しめるようになったのは、数年後の天明から寛政の時代、大体 1781 年から 1801 年ごろになります。烏亭焉馬（うていえんば）という戯作者が落とし話の会というのを開き、江戸に落語が復活しました。そして明治になった時、お上から「落語というものは何から始まり、今はどういう活動をしているか提出しろ」と命令され、「安楽庵策伝の醒睡笑という本から始まり、烏亭焉馬が江戸落語の中興の祖である」と提出したんだそうです。鹿野武左衛門については、島流しになった人間から始まったなんて言うとお上の覚えが良くないだろうということで、気の毒ですがなかったことにされたんですね。

3) 寄席の起源・三笑亭可楽と桂文治

🍷 初めて入場料をとってしゃべった三笑亭可楽

ほぼ同時期に三笑亭可楽（1777～1833）という人が出てきます。この人は現代の落語家の本当の大元になっている人です。いまでも9代目の可楽師匠が現役で活動されていますけれども。元々は櫛を作る職人だったんですが、話がうまかったので1798年7月に上野の下谷神社の社務所を借りて話の会とい



うのを開き、最初は山生亭花楽と名乗ります。この時初めて入場料を取り、これが寄席の始まりとされています。可楽はいまの落語のような長い話ではなく、いわゆる「一分線香即席噺」という、お線香が1分（約3[㊦]）燃えるか燃えないうちに終わってしまう即席の話をしました。例えば、「空き地に囲いできたんだってね」「へえ～」とか、「ハトが何か落としたよ」「ふ

一ん」とか、「雨が洩るよ」「やあねえ」とかね。

まあこの会場でやっても反応はいまのような感じですから、すぐに飽きられますよね。そこで可楽は同年10月に修行の旅に出ます。行った先は私の出身地の松戸。ここでひいきのお客さんをつけ、名前を虎溪三笑という故事来歴に倣って三笑亭可楽と改めます。彼は頓智（とんち）、頓才（とんさい）に秀でた方だったようで、謎かけというものを発明しました。ねずっちさんがやっているやつですね。お客さんから題をいただき、当意即妙に作り上げるという。

🍷 新聞とかけてお坊さんととく

その心は「けさ」きて「きょう」よむでしょう

謎かけの名人と言われた二代目春風亭梅橋の名作を紹介しましょう。例えば「新聞」という題をいただいてこうやった。「新聞とかけてお坊さんととく。その心は『けさ』きて『きょう』よむでしょう」。なかなか大変なもんですね。こんなものもある。「ウグイスとかけて昔のお吊いととく。その心は『なきなき』『うめ』に行くでしょう」。見事ですね。

だいたい謎かけというのは、結婚式やパーティーなどの会場で、「どうも話を聞いてくれないから謎かけしよう」てんでやる人が多いです。昔はキャバレーなんてところで、落語家がずいぶん謎かけをやったそうですよ。次のやつは、まっ昼間に、向学意欲に満ちあふれたみなさんの前でやるのははばかれますが、まあまあ歴史のお勉強ですからお話ししましょうか。「女性の胸」という題が出た時に梅橋師匠はとっさにこうやった。「女性の胸とかけてヤクザのけんか」ととく。その心は『すった』『もんだ』で大きくなる」。これ私が言ったんじゃないからね。



🍷 ○○先生とかけて新品のせっけん」ととく

その心はよく落ちるでしょう

こういう題が出た時にはこういうものをやればよいというのがある程度あるんですよ。例えば会社のパーティーに呼んでくれた人を「ヨイショ」したけりゃ、「○○会社とかけて満塁ホームランが2回」ととく。その心は『はってん』間違いなしでしょう」とか。何人か呼ばれたら大喜利になります。「○○会社とかけて富士山」ととく。その心は日本一でしょう」。なんてことになると「ワーアッ！」とくる。次の人が「○○会社とかけて富士山」ととく。その心は先細りでしょう」とやると「おいよせよ」。その次が「その心は日の出の勢いでしょう」とフォローしてまたまた「ワーアッ！」。

🍷 東京の落語家の元をたどると初代可楽に行き着く

可楽はやがて松戸から江戸に戻って評判になり、お弟子さんも大勢集まります。このお弟子さんたちが、人情噺、怪談噺、音曲噺といったいろんなジャンルの落語話を作ります。怪談話は初代の林家正蔵、音曲噺は船遊亭扇橋らが作りました。私の師匠は九代目助六、その師匠が八代目助六、その師匠が六代

目助六、その師匠が四代目柳亭左楽、その師匠が初代談洲楼燕枝、その師匠が初代春風亭柳枝、その師匠が初代船遊亭扇橋、そしてその師匠が初代の三笑亭可楽という具合に、東京の落語家の元をたどって行くと、たいがい初代可楽に行き着くということになっています。

🍷江戸っ子は昼間は歌舞伎、夜は寄席



江戸には200軒近くの寄席がありました。水野忠邦の天保の改革でお取りつぶしにされ、15軒に減ってしまいました。ただ庶民は娯楽を求めますから、まただんだん増えてきて幕末のころには再び200軒近くになったそうです。当時はお蕎麦屋さんの2階とか、小さな公民館みたいなところとか、30人くらいしか入れないようなところも寄席としてお上に届けていたそうですから、いまの寄席とはずいぶん雰囲気は違っていただいけません。ちなみに当時の江戸っ子は昼間は歌舞伎を見に行きますので、寄席は夜しかやっていませんでした。

このころに落語家の階級、すなわち前座、二つ目、真打というのができて上がります。前座の由来と言いますと、お坊さんが何人かでお説教をする時に、最初に話す若いお坊さんのことを前座と呼んだのが元だそうです。このあたりにも落語とお坊さんとの縁が見えますね。二つ目については二人目に出るからという説と、二つ目は紋付、羽織袴が許され、師匠の世話からも解放されてダルマに二つ目の目を入れられるからという説もあります。

🍷「トリを取る」「割に合わない」は落語界の符丁

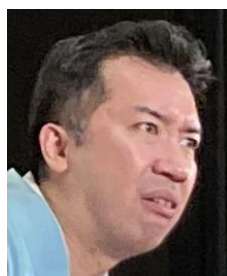
二つ目でさらに修行を積んで真打になります。いまはある程度の年季がたてば真打になれるんですが、当時は実力がなくて真打にはなれませんでした。真打になると最後に高座に上がることが許されます。主任、あるいはトリとも言いますが、トリが上がると照明用のろうそくの芯を打って消すというところからシンウチという言葉ができ、いまは当て字の真打とされています。余談ですがトリというのは芸人が使う符丁でして、あまり表で使うものじゃありません。トリすなわち主任は寄席のあがりをついたん全部預かり、出演者たちにこれを分配します。主任の中には自分がいっぱい取って、ほかの出演者に少ししかあげない人もいます。



つまり一番取るからトリと呼ばれるようになったのであって、あまりいい言葉じゃありません。私が入ったころはまだ大正生まれの師匠が大勢いて、「トリというのはいい言葉じゃないから、高座で話す場合は今日の責任者とか、今日の主任と言いなさい」と言われました。いまはみなさん知りませんから、「紅白歌合戦の白組の大トリは」とか言いますけれども、落語の世界だと白組でギャラを一番取っている人となっちゃう。もう一つ「割に合わない」という言葉がありますが、トリが配る給金のことを「割り」と言うんです。一生懸命頑張ったのに「割り」をたいしてもらえなかったら、「割に合わない」と言うんです。

ほぼ同時期に上方では初代の桂文治という方が、坐摩（いかすり）神社というところで入場料を取って寄席を始めました。

🍷立ち上がってほかの芸をする珍芸四天王が登場



江戸時代には、真打になるためには人情噺をしっかりと披露できなくては行けないとされていました。しかし明治になると、30分の中で笑うところが2つか3つしかない落語は流行らなくなり、なるべく笑うところがたくさんあるお話が求められるようになってきました。立ち上がってほかの芸、つまり珍芸と言われるものを披露する人も出てきました。明治の中盤には珍芸四天王というのもしました。ステテコの円遊、釜掘りの談志、へらへらの萬橋、ラッパの圓太郎。彼らがどういうことをしたかという、ステテコの円遊は立ち上がって尻っばしよりをして「ステ

テコ」という踊りを見せました。ステテコのことを当時はサルマタとかモモヒキとか言われていましたが、円遊がステテコを踊ったことでステテコと呼ばれるようになったのです。へらへらの萬橋は真っ赤な手ぬぐいでほっかむりをして、なんだかよく分からない踊りを踊り、釜掘りの談志は座布団をわきに

抱えてパントマイムのようなものを見せたそうです。ラッパの圓太郎は鉄道馬車で使われていたラッパを高座に持ち込んで吹いた。まあいずれも他愛のない芸ですね。いまで言うると一発芸というやつでしょうか。裸になって「そんなの関係ない」と言ってみたり、黄色いスーツで「ゲッツ」とかね。何が面白いのかよく分かりませんが、この4人の中で円遊だけは落語も大変うまかったようで、笑いの少ない落語に新しい笑いをたくさん入れて改良しました。それらはいまもずいぶん残っています。

🍷 落語協会と落語芸術協会はいがみ合っていない

大正時代になるといろいろな会派が生まれます。自分を高く買ってくれるところに移ったり、仲間同士のいさかいで別れてしまったりするんですね。ところが関東大震災を機に、小さい会派がいろいろあるのはいけないということで、五代目の柳亭左楽という人が東京の落語家を一つにまとめて落語協会というのを作りました。ところが次の年に柳亭左楽は一門を飛び出し、柳三遊睦連という会派を作ってしまう。数年後の1930年には日本芸術協会というものができました。私が所属している落語芸術協会の前身で、初代会長は六代目春風亭柳橋師匠でした。昭和30、40年代にはラジオのとんち教室でずいぶん売れたそうです。副会長は柳家金語楼師匠。テレビのバラエティ番組や映画で活躍されましたね。いま東京の落語家の多くは落語協会か落語芸術協会のどちらかに所属しています。



両者の仲が悪いと勘違いされている方も多いようですが、別れたのはもう100年近く前の話ですから、いまは両協会の落語家がいがみ合うというのはありません。一緒に仕事をしたり、仲良くお酒を飲んだりもします。ただ、東京の寄席の運営する場合には基本的に10日間交代です。例えば今月の新宿末広亭ですと、上席は落語芸術協会の受け持ち、中席は落語協会、下席は芸術協会という具合。落語芸術協会は公益社団法人、落語協会は一般社団法人で、両協会の理事や寄席の席亭さんたちが落語家の昇進などを決めることになっています。

4) 現代の落語界・落語家の生活

🍷 佐倉に呼んでもらって何とか生き延びました

寄席というところは、正直、生活の足しにはなりません。私なんか東松戸から通ってますから。片道千円近くかかりますし。終わってから後輩と軽くやろうかなんていうと、完全に足が出てしまいます。寄席というところはいわばショーケース。そこで見ていただいて、「小助六というのは面白いから、今度佐倉に呼ぼうじゃないか」といった具合にお声がけをいただく。いま私は末廣亭の主任、つまりトリですが、まあこれは名誉ということでね。じゃあどうやって暮らしているかという、きょうみたいに佐倉に呼んでもらったりして、何とか生き延びているというわけでございます。

落語家になって驚いたのはやたら飛行機に乗ることでした。実は私、飛行機が苦手なんです。高所は別にいいんですが狭いところが苦手ですね。高校生の時に初めて飛行機に乗って、もう二度と乗りたくないなと思いましたもの。落語家になることは小学生のころから決めていましたが、こんなに飛行機に乗る仕事だとは思っていなかった。先月のアタマには羽田から帯広に飛んで、JRで帯広から恵庭へ。そして新千歳から飛行機で女満別。最後は釧路に行きました。月末に今度は石垣島に行きまして、あしたは山口市で仕事なんです。こういう具合にお声がけをいただいて飛び回り、おしゃべりをさしていただいております。まにありついているというのが、現在の落語家の日常というところなんです。



☺「話してるんで静かにしてもらっていいですかあ」

まもなく落語をやらせてもらいますが、携帯電話をお持ちの方は電源を切るかマナーモードにしてくださいと思います。講義の時は電話が鳴ってもどおってことはありませんが、落語の最中に電話が鳴ると、そちらのほうにほかの方の気が行ってしまいますのでね。まれにその場で電話に出ちゃう方が



いるんですね。どこの寄席とははっきりは言いません。角が立ちますんでね。私も出させてもらってますから。それで、浅草にある演芸ホールでね、あたしがおしゃべりしてたら携帯電話が鳴りだしたんです。見ると年配のおばあちゃん。ハンドバックからすっと取り出したんで、切ってくれるのかなあとと思ったら、大きな声で「もしもし！ ももし！※×？∞△」。これやりづらいですよ。あたしも一生懸命しゃべってましたが、おばあちゃんはあたしより一生懸命しゃべってんですよ。何とかならないかなあといいながら落語を続けていたら、電話をすうっと下におろしたんで、ああ切ってくれたのかなと思ったら、あたしのほうを向いて大きな声で、「すいませ〜ん、話してるんで静かにしてもらっていいですかあ」。お前はここに何しに来てんだ。

2、落語の演じ方

1) 仕草

☺落語を面白く聞くためには想像力が大切

高校や大学では落語の歴史もお話ししますが、小学生の前では歴史なんかではなく、落語を面白く聞くためには頭の中でイメージを膨らませる想像力が大切だというようなことを話します。もちろん私たち落語家もみなさんが想像しやすいようにいろんな工夫をしています。例えばただおしゃべりをするだけじゃなく、仕草、つまり身ぶり手ぶりをつける。そして道具を2つだけ使います。右手に扇子、左手に手ぬぐい。この2つを使っているわけを先輩から聞いたことがあります。夏場の暑い時に汗をだらだら流しながらお客さんの前に出るのは失礼だということで、仰ぐために扇子、汗をぬぐうために扇子を持って出た。で、せっかく持っているから小道具として使うようになったということです。

☺手ぬぐいはちり紙・本・財布、扇子はしゃもじ・箸

手ぬぐいですと鼻をかむ時のちり紙になったり、本になったり、財布になったり。扇子はごはんをよそう時のおしゃもじになったり、ものを食べる時のお箸になったり。刀が出てきた時は扇子で表すんですが、長さが足りません。どうやって補うかという、目線、視線を使います。刀を持っているような恰好をしておいて、顔を下から上とか、目を上から下へとか動かす。見ているみなさんは「あっ、これくらいの刀を持っているんだな」と想像してくれるわけですね。長い刀、短い刀も目線や顔の動かし方で表現します。このように目線、視線がとても大事なので、落語家はあまり眼鏡をかけておしゃべりしませんが、まれにかけている方もいます。現役だと落語芸術協会会長の春風亭昇太師匠、亡くなった方では三遊亭圓歌師匠、橘家圓蔵師匠。そして、なぜか眼鏡をかけているお師匠方は、古典落語より新作落語、人情噺より滑稽噺に重きを置いている方が多いですね。



2) 語り

☺「死んじまえ〜〜〜え」「ありがと〜〜〜う」



落語はおしゃべりを聞いてもらう芸能ですから、やはり仕草よりおしゃべりの仕方のほうをより工夫します。例えば遠くの人に話しかける場合にはあまり大きな声は出さずに、雰囲気で情景を伝えます。あごをちょっと上にあげて言葉の最後のほうを伸ばすんですね。「こんにちわああああ〜〜あ」

「あ、ど〜〜〜うも〜〜〜」。目の前にいる人にあいさつする場合には右向いたり左向いたりするだけです。「こんにちは」「どうも」。これだけで構わない。友だちがてくてく歩いて旅に出る。今度いつ会えるか分からない。もう2度と会えないかもしれない。そのお見送りの情景です。初めは「気を付けて行って来いよ」「ありがと」。目の前にいるからこれくらい。でも相手はだんだん離れていきますから。(だんだん声を小さくしながら)

「気を付けて行って来いよ〜う」「ありがと〜う」「けがするなよ〜〜う」「ありがと〜〜う」「病気になるなよ〜〜〜う」「ありがと〜〜〜う」「泥棒

には気をつけろ〜〜〜お」「ありがと〜〜〜〜う」「早く帰ってこいよう〜〜〜〜う」「ありがと〜〜〜〜う」「戻ってくるなあ〜〜〜〜あ」「ありがと〜〜〜〜う」「死んじまえ〜〜〜〜え」「ありがと〜〜〜〜う」。おしまいの方はよく聞こえていないんでね。



3) 落ち

☺おばあさん「だれだあ〜い」、九官鳥「新聞屋で〜す」

落語で一番大事なのは「落ち」ですね。先ほど、現在の落語家の大元である三笑亭可楽について話しましたが、可楽の落語は一分線香即席噺という即席の話でしたよね。こういうのを地口落ちと言いました、いわゆるダジャレですね。でも落語はダジャレで終わると決まっているわけではなく、いろんな種類の落ちがあります。例えば「反対落ち」「逆さ落ち」なんてのがある。これは物語が途中で逆さまになってしまいます。あるおばあさんが九官鳥を飼っていました。おばあさんはだれかが訪ねて来た時にいちいち玄関に出るのが面倒で、いつも家の中から「だれだあ〜い」と声をかけていたんですが、これを九官鳥が覚えちゃった。ある日、おばあさんが出かけている時に新聞屋さんが集金に来て「こんにちわあ」と声をかけると、九官鳥が「だれだあ〜い」。新聞屋が「新聞屋で〜す」。また九官鳥が「だれだあ〜い」。「新聞屋で〜す」「だれだあ〜い」。「新聞屋で〜す」「だれだあ〜い」「新聞屋で〜す」。この応酬が果てしなく続き、新聞屋さんがばてて倒れちゃった。しばらくしておばあさんが戻ってきて、新聞屋さんの顔を覗き込んで「だれだあ〜い」。家の中から九官鳥が「新聞屋で〜す」

☺高座で仕草を見ないと分からない「見たて落ち」

「見立て落ち」なんてのもあります。お父さんとお母さんと子どもが、ペットのサルを連れてドライブに出かけた。途中で交通事故にあい、家族3人が救急車で運ばれる。警察官が現場検証していると、サルが後ろで「キー、キー」騒ぐ。利口そうなサルなので警察官がいろいろ聞いてみる。「子どもは車の中で何してた?」「ケケケケ、クークー、キョキョー」「ゲームで遊んでたのか?」「お母さんは何してた?」「アケアケケロ、ココココケッ、パタパタ」「ああ、お化粧してたのか?」「お父さんはどうだった?」「レロレッ、ココケコキッキ、ガガガガプー」「スマホでおしゃべりしてたんだ。事故の原因がだんだん分かってきたよ。ありがとよ」なんてね。このシーンは読んだり聞いたりしただけでは分かりません。現場で仕草を見てもらわないとね。

3、演目二題

～～「平林」～～

前座噺のひとつで、入門するとまずこういう話を覚えます。有名な「寿限無」と同じように口慣らしとされ、これらを高座で何度もやっているうちに口慣れて舌が回るようになるという。二つ目、真打になっていくと、こうした話ばかりでなく長い話も覚えます。

(あらすじ)

ごん助は平河町の平林（ひらばやし）邸に手紙を届けるよう主人に頼まれる。行き先を忘れないように、口の中で「ヒラバヤシ、ヒラバヤシ」と繰り返しながら歩くが、結局忘れてしまう。そこで手紙に書かれた宛先の「平林」をどう読むのかを、通りかかった人にたずねたところ、最初の方は「それはタイラバヤシだ」と答える。しかしごん助は、タイラバヤシは少し違うような気がして別の人に聞くと「これはヒラリンだろう」と答える。これも違う気がして別に人に尋ねると、「イチハチジュウノモークモクと読むのだ」と教えられる。さらに別の人は「ヒトツトヤツツデトッキキだ」と。

困ったごん助は教えられた読み方を全部つなげ、大声で繰り返しわめく。「タイラバヤシかヒラリンか、イチハチジュウノモークモク、ヒトツトヤツツデトッキキ」「タイラバヤシかヒラリンか、イチハチジュウノモークモク、ヒトツトヤツツデトッキキ」……。この様子を見た通りがかりの人が「どうしたんだい」とたずねる。ごん助が「旦那さま、どこのどなたで？」と聞くと、「あたしゃ平河町のヒラバヤシだよ」。するとごん助「ヒラバヤシー?! ああ、またひとつ増えちゃった」



(講演後のコメント)

🐼 本来の「落ち」はいま使えないので変えた

きょうは安楽庵策伝が書いた醒睡笑の中から何かをやりようと思っていたので、ひとつ目はこの「平林」に決めました。陽気で明るく他愛のない話ですから、話し方もそういうところに重点を置きました。古典落語としての「平林」は本来、「タイラバヤシかヒラリンか、イチハチジュウノモークモク、ヒトツトヤツツデトッキキ」と騒いでいるごん助が、「どうした、気でも違ったのかい？」とたずねられ、「いえ、字が違いました」と答えるという落ちなんです。でも気が違ったなんていまは使えないので、さっきやったのは亡くなった桂枝助師匠が考えた落ちです。ほかに、騒いでいるのを見て「祭りばやしのけいこかい?」「いえヒラバヤシです」なんてのもある。落語の落ちは人によって違うし、演目によっていろんな落ち方があります。人情噺なのに落ちがダジャレということもある。それはそれでいいと思いますけどね。使えない落ちを変えてでもやりたいというのは、それだけ受ける話だということでもありますね。「平林」は子どもさんによく受けるんですよ。

～～「井戸の茶碗」～～

古典落語の「人情噺」で、元々は講談です。講談は落語よりためになる話が多いですね。

(あらすじ)

くずやの清兵衛は曲がったことが大嫌いで、「正直清兵衛」と呼ばれていた。ある日、清兵衛は浪人の千代田から仏像を買い取ってほしいと頼まれて200文で引き取り、それ以上で売れたら儲けを折半するという条件で話しをつける。清兵衛が細川屋敷を通りかかると、家中の高木佐久左衛門に「その仏像は



なんだ？」と呼び止められる。高木は仏像が腹籠（仏像の中に小さな仏像がある縁起物）であることに気が付き300文で買い上げた。ところが仏像の中から50両の小判が出てきたため、中の「きんす」まで買ったわけではないので元の持ち主に戻したいと思う。

高木は清兵衛を探すため、細川屋敷を通りかかるくず屋の顔を片っ端から改める。この様子がくず屋仲間の中で話題になり、清兵衛は屋敷の前を掛け声を出さずに素通りをしていたが高木に気付かれ、50両を千代田に届けさせられる。しかし千代田は「その金もいまの持ち主のものだと」と言い張って受け取らず、

押し返された高木もまた受け取らない。困り果てた清兵衛が、千代田の住む長屋の家主に相談すると、家主は「近ごろにないいい話だ」と仲介を買って出て、千代田に20両、高木に20両、清兵衛に残りの10両を配分すればどうかと提案する。高木は承諾したものの千代田はまたも拒絶したため、清兵衛が「何か売ってください。それを20両で買ったことにしましょう」と提案したところ、千代田が小汚い茶碗を高木に譲るといふことで騒動は収まった。

この噂が細川のお殿さまの耳にも入り、高木がその茶碗を見せたところ、出入りの鑑定家が高麗茶碗の名器「井戸の茶碗」であることに気が付き、お殿さまは300両で買い上げた。高木は清兵衛を呼びつけ、折半ということで千代田に150両を届けさせると、千代田は「娘を高木がめとってくれたら、結納として150両を受け取る」と提案。高木も快く受けると言うので、清兵衛が「磨けばいい女になりますよ」と言うと、高木はこう返す。「いや、磨くのはよそう。また小判が出るといけない」

(講演後のコメント)

☺ 人情噺には笑いをあまりたくさん足さない

今回の講演の内容に合わせ、一席は落語の始まりみたいなもの、あとの一席は人情噺っぽいものを行おうということで選びました。私の個性というか、まだ若いこともあり、あまりもったいぶってしゃべるのは苦手なんです。なので「井戸の茶碗」のような人情噺を話す際は、お涙ちょうだいというよりは、テンポに重点を置いてポンポンと話を進め、最後に「ああよかったね」という感じの持って行き方にしたいと心がけています。笑いの少ない人情噺に笑いをたくさん足すということはあまりありません。ギャグの部分が入りすぎると、ストーリーがぼやけちゃうんですね。「井戸の茶碗」は、正直者たちそれぞれが、それぞれのことを考えて行動して、ハッピーエンドになるという人情噺が主軸ですから、笑いの部分をいっぱい入れちゃったら、話が何だか分からなくなっちゃう。2つ3つ足すことはありますが、その場合はどこかを削りますね。

(ちなみにきょうのお客さんはどうでしたか?)。頭のいい人も、そうでない人もいましたけど。そんなことより感染対策で間隔が広すぎるのが、正直やりづらいですね。私としては、間隔が広いのと、会場の大きさを考えて、ふだんよりゆっくりと話したつもりです。

4、余興・寄席の踊り「かつぼれ」

落語家として立ち上がって踊ったのは、先ほどお話しした珍芸四天王の一人・ステテコの円遊が初めてでした。それまでは座り踊りといって、せいぜい膝立ちで踊っていました。落語以外の方は立って踊っていたそうで、豊年祭梅坊主という方は、あまり表立っては言えませんが、願人坊主すなわち乞食坊主として、大道で踊りを踊ってものもらっていました。これが評判となり寄席のほうでも演じられるようになったということです。



そして、豊年祭梅坊主のお弟子さんの中の一人から、私の大師匠である八代目助六が踊りを教わり、うちの一派は落語が終わった後に踊りを踊るようになりました。大師匠は踊りの名人として名高い方でした。私はそういった上手な踊りではありませんが、こんなものもあるよというところで「かつぼれ」というのをご覧に入れたいと思います。

【質疑応答】

Q 言葉に関するいろんな制約が増えてきた中、落語の古典なんかには問題視される言葉も多いと思います。しかしいちいち言い換えていたんでは、話がスムーズに運ばないといった支障があると思うのですが、どういった対応をされているのでしょうか。

☺ 「井戸の茶碗」は人身売買の話？

A 私は変えなくてはいけないと思っています。例えば先ほどの「井戸の茶碗」をあるところでやった時、「これは人身売買の話ではないのか」と言われました。親が勝手に娘を 150 両で売っちゃうわけですから。いい話だと思ってやってたんですが、人によっては女性蔑視ととられるわけですね。「替わり目」という滑稽話の中では、亭主が「つまみにシャケをくれ」というと、女房が「あのシャケ食べちゃった」と言う。すると亭主が「女は女らしくいただきましたと言え」と怒ったというくだりがあるんですが、私はいまここをカットしています。そのせりふがあるとないとでは感じ方が大きく変わる場合はなるべく残しておきたいですが、必要でないものは取ってしまおうというのが私の考えです。話自体に障りのあるものもあります。体の不自由な方が主人公として出てきたり、生まれをバカにしたり、薩摩や長州の人を田舎者の代名詞として登場させたりとか。いろいろ気を遣いますが、これからますますやりづらい世の中になるでしょうねえ。

Q 小学校の時に落語家になりたいと思われたそうですが、何かきっかけがあったのですか。

☺ 落語を聞くと頭がいい、笑うと頭がいい！

A たまたまテレビで落語を見ていたら、春風亭柳昇の「免許証」という新作落語をやっていて、これが底抜けに面白かったんです。最初に聞いたのが古典落語のむずかしい人情噺や怪談噺だったら、たぶん好きにならなかったと思うんですけど。「免許証」というのはばかばかしい話でね。警察官が検問しているところにいろんな人が車でやってくる。免許証と全然違う名前や生年月日を言うやつだとか、水商売のおねえさんが「今度うちの店に来てちょうだいよ」と警察官を口説いたり。最後に来たのが片言の日本語をしゃべるへんな中国人。これいま絶対だめですけど。「あなたどこの人ですか？」「ア～～、リンリンシャンシャンプウーリンパイ。ペキン、モウタクトウ」「日本の方じゃないんですか。じゃあ行ってください」「すまねえな」「えっ？」

大笑いしてたら、隣にいたおばあちゃんが「あっちゃん、何が面白いのかわかるの?」と。「面白いから笑ったんだ」と言ったら、「あっちゃん、頭がいいんだねえ。落語を聞いて理解して笑えるというのは頭がいいんだ」とほめられまして。それからほかのを聞いたり、小遣いでカセットテープを買って聞いたりしました。うちの父親は消防士なんですが、人を助けるような仕事とか、大きい会社に勤めて責任がかかる仕事は自分に向いてないと、小学校4年生くらいで気づいていたので・・・。きょうの私の落語がつまらなかったからとって、みなさん急に命を落としたり、会社がつぶれたりしないでしょ。

先ほども言いましたように、落語を聞くと頭がいい、笑うと頭がいいんだそうです。きょうも何人かすごく頭のいい人がいました。そうでもない人もいましたけど。これから落語を聞く時は、率先して笑っていただきますよう、どうぞよろしく願いいたします。



雷門小助六師匠のプロフィール

生年月日 昭和57年1月19日
出身地 千葉県松戸市
本名 山口敦（やまぐちあつし）
出囃子 夜桜
趣味 熱帯魚観賞

【芸歴】

平成11年9月 雷門助六に入門
平成12年4月 楽屋入り
平成16年4月 二つ目昇進
平成25年5月 真打昇進、三代目「雷門小助六」襲名
平成29年 国立演芸場花形演芸大賞銀賞受賞